

『拾遺古徳伝絵詞』の製作事由

柳 瀬 彰 弘

法然坊源空の伝記は、彼の歿後まもなく門弟等によつて書き始められ、もっとも古いものとして注目される『源空聖人私日記』をはじめとする数多くのものが書かれた。然るに親鸞の曾孫にあたる覚如は、『拾遺古徳伝』という名の許に源空伝を書き表わしたのである。このことは『存覚一期記』に

「十二歳正安三 冬比長井道信（鹿嶋門徒）依ニ黒谷傳九卷新草所望ニ在京、仍大上令レ草レ之給、」と語られ、また『拾遺古徳伝』（常福寺本）の奥書に次のようにある。

于時正安第三辛歲從ニ黄鐘中旬九日、至ニ大呂上旬五日、首尾十七箇日、扶膺忍レ眠草レ之、辭既卒爾、短慮轉迷惑、紕繆胡靡レ期、俯乞、披覽之宏才要加ニ取捨之秀逸一耳

衡門隱倫釋覺如 三十二歳

これらの事から、覚如は長井の道信の所望により、正安三年（一二三〇）の十一月中旬から十二月にかけてのわずか十七日間に九卷もの源空伝を書き上げたということになる。この「拾遺」という言葉に注視し、何故これほどの短期間に源

空伝を書き表わさなければならなかったのかを考察し、それが覚如の思想とどのように関連しているのかについて私見を述べてみたいと思う。

『拾遺古徳伝』が撰述される以前の源空伝をみると、成立年代の明確な『伝法絵』（本朝祖師伝記絵詞一二三七年撰）を基準として次のように考えられる。先ず源空伝の古いものとして『源空聖人私日記』や『知恩講私記』ならびに『法然上人伝記』（醍醐本）があげられ、『伝法絵』をはさんでその後として『法然上人伝法絵』（専修寺本）、『法然上人伝』（増上寺本）、『法然上人絵』（弘願本）、『法然上人伝絵詞』（琳阿本）等があげられるが、その成立順位については諸説がある。しかしいずれにせよ、今は成立順位に注目するのではなく、『伝法絵』の前後に撰述された数多くの源空伝が『拾遺古徳伝』撰述へ如何なる影響を与えたかについて、諸仏の概略を述べながらみてゆきたい。

『源空聖人私日記』（二巻）は、浄土真宗高田派の専修寺に

所蔵されている親鸞自筆の『西方指南抄』（三巻）のうち、中末に収められており、現存する多くの源空伝の原形であるとされる。また『西方指南抄』の奥書に「康元元年十月十四日、愚禿親鸞八十四歳書之」とあることから、源空歿後四十五年以前に作られていたことになる。内容は極めて簡略であるが、「権化之再誕」としての源空の誕生より、生家・出家・得度・修学・開宗等、さらに源空歿後における公胤の靈夢に至るまで、源空を物語るすべての項目が記載されている。

『知恩講私記』（二巻）は、他の源空伝と比較すると、標題によっても了解できる如く「講式」の私記であり、文の型体が異なっている。その中に源空の伝歴が述べられ、また表白の上で、「諸宗通達ノ徳」・「本願興行ノ徳」・「専修正行ノ徳」の三徳を讃嘆している。これは後に覚如が著した『報恩講私記』に大きな影響を与えたものと考えられる。そしてその奥書に「安貞二年八月十二日以上蓮房本書了 沙弥信阿弥陀仏」とあり、源空歿後わずか十六年にして信阿弥陀仏によって書写されているところからみると、原本である上蓮房の本は、さらに古いことになり、既述の『源空聖人私日記』と比肩しうるものと考えられる。

『法然上人伝記』（醍醐本一巻）は、醍醐三宝院より発見されたもので、「一期物語」・「禪勝房との問答」・「三心料簡および法語」・「別伝記」・「御臨終日記」・「三昧発得記」の六篇

『拾遺古徳伝絵詞』の製作事由（柳瀬）

より成っている。その中で「一期物語」は『拾遺語燈録』所収の『浄土随聞記』とほぼ同じ内容であり、さらに「禪勝房との問答」、「御臨終日記」、「三昧発得記」の三篇は、『西方指南抄』所収の「或人念仏之不審、望人に奉問次第」・「法然聖人臨終行儀」・「建久九年記」とおのおの同じである。

『伝法絵』（本朝祖師伝記絵詞四巻）は、第四巻の奥書に「嘉禎三年丁酉五月に始之、同十一月廿五日、於三州鎌倉八幡宮本社之辺二図之」

鎮西筑前国之住人左兵衛尉源光忠 法名觀空 行年卅三 云々

願主沙門航空六十九

と記され、また第一巻の第一段に「いま先師上人念仏すゝめ給へる由來を、画図にしるす事しかり、于時嘉禎三年丁酉正月廿五日沙門航空記之」とあり、さらに第二巻の奥書に次のように記載されている。

嘉禎三年丁酉十二月廿五日筆功已畢

此絵披見之人、奉_レ礼三尊之像、其詞説明之輩、誦_レ大經之文、願_ニ身口意之行、念_ニ阿弥陀之名、往生極樂之志無_レ式、勿_レ疑_レ之也、爰航空執筆而草_ニ旨趣、觀空和墨摸_ニ画図、願結_ニ一仏浄土之縁、共証_ニ九品蓮台之果、乃至無遮平等 敬白

航空在判
觀空在判

内容は上記の三つの源空伝に見られない新しい記事が数多

『拾遺古徳伝絵詞』の製作事由（柳瀬）

く載せられている。

『法然上人伝法絵』（専修寺本残欠一巻）は、浄土真宗高田派の専修寺に所蔵されていたもので、下巻のみ現存している。その奥書は「草本云 永仁四年十一月十六日云々 永仁四年^{丙申}十二月下旬^{六第}書写之」と書かれており、筆跡からみて顯智（一二二六—一三一〇）の書写と思われる。内容は前述の『伝法絵』と比較すると、若干省略されているところもあるがほぼ同じで、むしろ「七箇条の起請文」についての記述などは詳細である。また本書によって増補された部分は、「室の泊における修行者が三心を具すべき事についての問いに対する答」・「塩飽の地頭・西仁が自力他力の事についての説法」・「勝尾寺での聖覚による唱導の内容」・「随筆に対する教化」等がある。

『法然上人伝』（増上寺本残欠二巻）は、増上寺に所蔵されており、時国中陰の仏事より大原談義に至る箇所のみ現存している。その構成内容は、『伝法絵』と近似している。例えば「時国中陰」につづき「菩提寺入室」・「母子訣別」・「登山入室」・「出家受戒」・「青竜出現」・「学匠訪問」・「道俗教化」・「三尊出現」・「大原談義」等、いずれも『伝法絵』と構成を同じくしている。ただし、一部の記載については『伝法絵』よりも詳述しているところがあり注目される。

『法然聖人絵』（弘願本残欠四巻）は、第一から第三巻まで

は堂本四郎氏の所有で、第四巻は知恩院に所蔵されている。

弘願本は、『専修寺本』や『西方指南抄』と合致するところが多い。すなわち「七箇条制誠」の署名者順が『西方指南抄』と同じであり、「自力他力の問答および三心についての問答」は、「十一箇条問答」より転用したものである。

『法然上人伝絵詞』（琳阿本九巻）は、『伝法絵』に基づいていると思われるが、かなり増補されている。例えば『伝法絵』に記載されている『女人往生の法談』は『琳阿本』には見出せず、『伝法絵』の「七箇条の起請文」・「信空上人これをおそれ給ひける夜の夢」などは『琳阿本』では「送山門起請文」・「円明善信上人是ををそれ給ひける夜の夢に」とそれぞれ書き変えられている。

これらの源空伝に対して『拾遺古徳伝』をみると、その構成内容から『伝法絵』に近いところがあり、また当然のことながら親鸞が書写した『西方指南抄』にも依拠していると思われる。すなわち、第一巻保延七年の時国夜討より、その中陰念仏報恩・菩提寺入室・母子訣別・上洛・登山、第二巻出家受戒・皇円師事・観空対面・青竜出現・暗夜放光・保元元年の求法と南都遊学、第三巻善導来現（以上『伝法絵』一）・上西門院説戒・治承四年の東大寺大勸進辞退、第四巻大原問答（この一段は『伝法絵』一）、第五巻清水寺説戒・勢至行道、第六巻七箇条起請文・頭光踏蓮（以上『伝法絵』二）、

第七卷室泊遊女教化・塩飽庄到着、第八卷勝尾隠棲・京洛還帰・大谷坊居住（以上『伝法絵』三）・往生、第九卷中陰法要・廟堂破邪・改葬等である。このように『拾遺古徳伝』も上記の源空伝と比較して何ら変わるところがないようにみえるが、『拾遺古徳伝』のみ親鸞に関するところを記載しているのである。その内容は次の如くである。

『選撰本願念仏集』は月輪の禪定博陸の告命によりて元久元年（きのえ）のはる聖人撰集したまふ——中略——しかるに元久二年（うしのと）の善信聖人恩恵を蒙て『選撰集』を書写したまふ撰集以後これ最初なりおなじきとし初夏仲旬第四日『選撰本願念仏集』の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」と、釈の綽空外題のの字とををば聖人真筆をもてかゝしめたまひき、これを授与したてまつる。善信聖人おなじき日、聖人の真影まうしあづかりて図画す、允容によりてなり（六巻第四段）

『拾遺古徳伝絵詞』の製作事由（柳瀬）

- 1 細川行信氏「源空の浄土開宗と門下の分流」(大谷大学研究年報 No. 24)
- 2 細川行信氏、田村圓澄氏(『法然上人伝の研究』)、井川定麿氏(『法然上人絵伝の研究』)等、

(大谷大学大学院修了)